成できず、作業から帰って幕舎で倒れる者が日増しにふえ、筆舌では表すことのできない過酷な状態であった。年が明けて三月ごろより食事がよくなり出す。夜は食堂で食事ができるようになり、炊事係の人たちの努力でいろいろの工夫がされた献立となり、我々を楽しませてくれた。

収容人員一万人。炊事は第一、第二と分かれていて、私は第二炊事の糧秣倉庫で復員までここで働くこととなる。毎日、糧秣の払い出し、駅へ米、大豆などの受領、コルホーズへの野菜、缶詰などの調達受領。ソ連兵歩哨への食糧の払い出しもあり、大変な仕事だった。

そのうちに復員が始まり収容人員も減少し、第二炊事は閉鎖され、第一炊事の倉庫へ移る。

昭和二十四年七月、復員の編制がなされ、その一員として帰国することとなりナホトカへ向かう。七月二十七日、恵山丸にて舞鶴港に上陸、帰国となる。

戦後五十年、共に帰国を夢に頑張り、ついに望みを果たし得ずして凍土に散った戦友のことは、一日とて忘れることはない。

シベリア抑留体験記

静岡県　赤堀四郎

大正五年静岡生まれ。地元高小卒後、家業の農業手伝い後、上京。書籍店に勤む。現役兵として昭和十三年三月、広島集合。関東軍綏芬河陸軍病院要員として入隊。以来、転属二回。二十年六月、第十一国境守備隊解散、歩兵第二七九連隊編制。八面通に駐屯し、西方自興屯に陣地構築作業に入る。同年七年、朝鮮兵百三十名、現地召集兵約八百名入隊あり。衛生業務多忙を極む。装備は銃及び帯剣など皆無で、竹製水筒携行、軍服は通常支給あり、全員陣地構築に就く。

八月九日未明、ソ連機の飛来、爆弾及び機銃掃射を受け開戦を知る。八月十二日、連隊は牡丹江市民防衛の命を受け、東方愛河に転進、第一、第三大隊をもって布陣する。第二大隊は前記自興屯に残留、ソ連の前進の防御に苦戦、ついに全滅する。愛河における戦闘

は師団砲兵隊の援護を受け、来襲敵戦車約三十車両中七両を破壊するも、なお進入する戦車に決死隊を編制、爆破を敢行。各中隊ともに戦死者、負傷者多数に及ぶ。部隊は八月十四日夜半、横道河子方面へ退却を開始する途中、橋梁爆破に友軍が失敗したためソ連戦車の追撃を受け、部隊は混乱する。八月十八日、横道河子へ到着、終戦を知る。生き残った戦友たちと無事を喜び合い、戦争はこれで本当に終わったのかと不安ながら、胸をなでおろす。ソ軍による武装解除も間近に迫ったので、武器一切を付近の川に投入する。

武装解除後、海林までソ軍監視の下に行軍野宿し、収容所生活となる。しばらくしてから牡丹江駅に作業兵を出すようになり、兵士の話によると、ソ連行きの貨物車の輸送準備らしいが、ソ連から来る列車に逆送されてくる。病人や弱兵らが多数あるため、作業不能者を送り返すのだ。作業大隊はみなソ連行きで、日本へ帰国はウソだと明言した。私はこの話を信じ、覚悟を決めていた。

入ソは十月末、牡丹江駅より貨車に詰め込まれ、非衛生な家畜並みの扱いを受け、約一カ月後、収容地タイセット地区ネーベルスカヤに着く。もう一面の銀世界。この駅までは鉄道ができており、行軍は少しくらい。十月十五日、海林編制の作業第一四八大隊千名はこの地に完全抑留の身となった。ドイツ兵か囚人収容の古びた天幕が並び立ち、幕舎生活が始まった。石油基地があり、糧秣の基地と町作りの計画で作業は倉庫と官舎の建築が主だった。倉庫完成後は、毎日到着する貨車より倉庫へ搬入、特に樺太からの冷凍サケ・マスの五十トン車が多く、昼夜別なく強制労働で酷使された。入浴など全くなく、冬季は週一回くらい、小桶二杯で全身を洗う。シラミなどの発生も多く、設備ができてからは月一回程度、衣服の乾熱消毒あり。身体検査は、裸体になり、尻の肉をつまんでの健康度等級をつけて作業に出すなど、まことに乱雑なものだった。

労働は大工仕事と鉄道路盤の土盛り作業、汽車用燃料マキづくり、鉄道橋梁は木製のため、橋脚の丸太打ち込み作業、これは満州よりの戦利品ヤンマーディーゼル杭打機を使用したが、ノルマ倍達成、増食となっ

たのは初めてだった。

労役の統制管理は本部が行い、ソ連側作業主任がほとんど指示した。作業出発、往復路の監視は厳しかったが、異変ということはなかった。衣服類は当初は着のみ着のままにて、自分で補修するも、乞食以下の哀れな姿で働かされたが、後年は何とか支給あり、困ることもなくなる。

食事情は、入ソ当時は皮つき高粱や粟、小麦、大豆、エンドウなどで、副食は魚、肉、野菜などほとんどなく、ジャガイモ一切れのスープくらい。空腹に堪えられず野草を多食したため、栄養失調者が続発、死亡者が出た。二年目後半ころより、食物も質量ともに若干ふえる。休日はたまにはあったが衣服補修などで、娯楽など不可能。

民主化教育は三年目あたりから本格的となり、神経を使わない吊るし上げとなる。作業懲罰は厳しく、建築屋根のへぎ板打ちの折、兵の手が凍って小釘打ちが困難でノルマ上がらず、現場で焚き火をしたところへ収容所長が来て、焚き火は不可、責任者のおまえは営倉だと、三日間、野菜貯蔵庫の凍りつく中に入れられた。それが原因か、四年目の春、懲罰大隊に送られたが、その収容所は空き家となっていたので、監視兵に話し、同僚八人でカッタマーロ部落の作業場に起居となり、鉄道完成区のレール測定と補修をする。監視兵もなく、囚人一人の老人と自由な労働ができた。過ぎし過酷な抑留生活も深く考え悩んでいては日本帰国まで体がもたないと思い、何事も現時点の労役作業を適宜にこなしていき、余分なことは考えないという気持ちで過ごした。

帰国の知らせは最初の入ソ地ネーベルスカヤの収容所で受けたが、全く夢心地であった。ああ、これでもうノルマの生活から脱出できたかと感無量。ナホトカに集結、約一カ月民主教育を徹底的に受け、ようやく乗船に至る。船内平穏無事、舞鶴港に上陸。諸検査の上、一路郷里静岡へ。

軍隊、抑留と空白の十二年、出おくれた戦後社会では、生活基盤は年老いた両親の家業たる農業をやるしかなかった。